



猪高の森自然観察だより 5月号

開催日時：2024年5月26日（日）

天候：曇り時々晴れ 気温：最低 18.0℃、最高 26.9℃（名古屋に於いて）

テーマ：虫食いの葉っぱを探してみよう！

参加者構成：一般 23名（内 NACS-J 会員 3名、小学生以下 1名）

コース：森の集会所 → 畑 → 井堀の大楠 → 井堀下池 → 井堀の谷地田（棚田） → ハンノキ湿地 → こもれば池 → シダレザクラの里 → 森の集会所

華やかな花盛りだった春の一時期が過ぎ、初夏の青々した季節になりました。人によっては大嫌いな虫のいろいろが、登場してきます。しかしながら、虫がいないと多くの生き物たちの糧がなくなり、受粉を任せている多くの果物が稔りません。

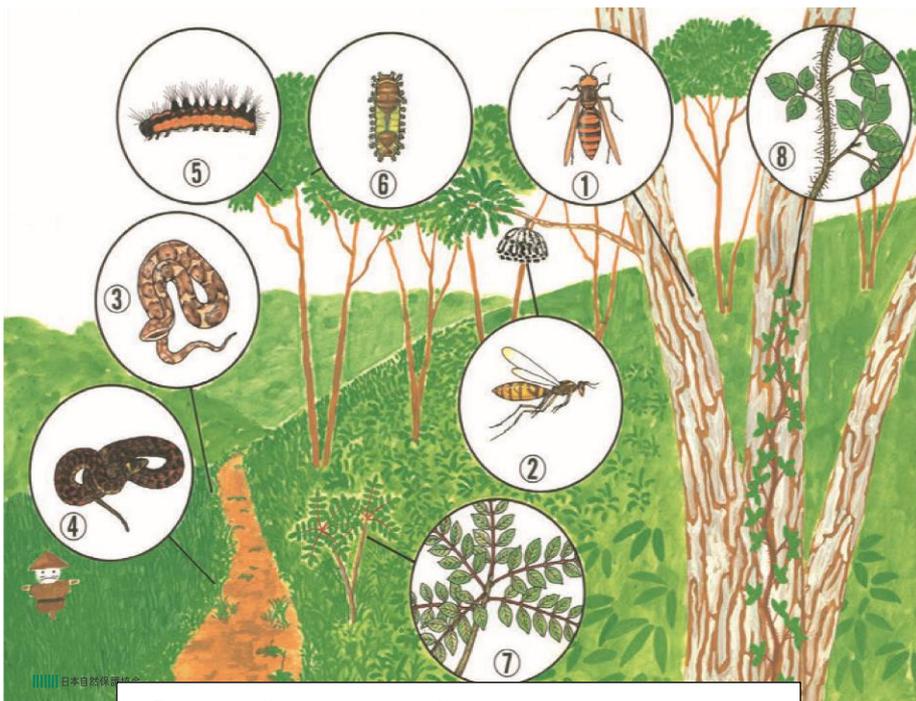
ここはひとつ、少しずつでも、彼らの事を知っておきましょう。タイトルは「虫食いの葉っぱをさがしてみよう」ですが、「見つけたら、裏側には何があるかな？」が続きます。ご安心ください、中々主人公は見つけれられません。

（左上の画像はヒゲナガカメムシ。集会所の壁にて。前足が太い?! 力持ち？

尚、画像は当日観察されなかった生き物も含まれます。）

○この時期から注意してもらいたい生き物たち

毎年の事ですが、春の花々たちの時期が過ぎ、初夏に移ってくると、散策路で注意を払って頂きたい生き物たちの活動が盛んになってきます。しかしながら、事前の知識と注意を払うことで、その事故は未然に防ぐことが可能です。



- ①スズメバチ
 - ②キアシナガバチ
 - ③マムシ
 - ④ヤマカガシ
 - ⑤ドクガの幼虫
 - ⑥イラガの幼虫
 - ⑦ヤマハゼ・ヤマウルシ
 - ⑧ツタウルシ（猪高緑地では確認されていません。）
- ①と②が接近してきたときには、身を低くし、静かにその場から離れるか、じっとしてハチが飛び去るのを待つかします。手で払ったり走って逃げ

「自然保護 危険な生き物ピクチャーカード」より

だしたりしてはいけません。攻撃してきたり、追っかけてきます。

③と④は毒を持ち、草むらなどにいますから、咬まれないように入り込まないようにします。

⑤と⑥は毒毛を持っています。葉の裏などにいることがあるので葉を触るときは注意を払います。

⑦と⑧はかぶれることがあるので、触れないように注意を払います。

これからの時期の散策には以上のような注意を払います。

○虫食いの葉っぱの犯人を探してみよう。



こもれば池のマルバヤナギの葉が食べられていたので、探していると犯人が見つかりました。

これは「ヤナギルリハムシ」の仕業です。光沢のある美しい虫です。

この幼虫は見つかりませんでしたが、幼虫の天敵はカメノコテントウとのことです。



アカメガシワの葉がレース状に食べられています。調べると2ミリ程度の大きさのサメハダツブノミハムシ（右の画像）の仕業のようです。



アベマキにいたマイマイガの幼虫です。

卵から生まれたばかりの幼虫（1齢幼虫・黒色）のみ毒刺毛を持つそうです。1齢幼虫は集団でいるので区別はできます。2齢からは派手な色にはなりますが、毒はありません。

時として大発生をして、話題になります。



イチモンジカメノコハムシの幼虫（左）は脱皮した殻を背中に乗っけてカムフラージュをしています。右は成虫、掃除機のルンバのような円盤状です。

ムラサキシキブの葉が穴だらけ。これは、イチモンジカメノコハムシの仕業。



左はサルトリイバラにいたルリタテハの幼虫です。おどろおどろしい姿をしていますが、毒はありません。



成虫（右下）は大変美しい姿をしています。成虫越冬するので、4月の暖かい日などに良く見受けられます。



ハムシの仲間は日本では600～800種いるとされています。特徴がはっきりしている種は別にして、近似種が多いので専門家の方に判断を仰がないと、正直のところわかりません。（左はエノキにいたハムシの仲間、右は普通種のクロウリハムシ。）



最もよく知られている幼虫のひとつ。アゲハチョウの若齢幼虫です。ミカンの仲間の葉を食べるので、育てている方には恨まれているようですが、突然いなくなってしまうのは、鳥たちに食べられたり、ハチの仲間に狩られたりしているかららしいです。彼らも生き残るのは少数です。

○ちょっと危ない虫たちもいますので気をつけてくださいね。



1ページ目で注意すべき生き物たちを紹介しましたが、下見の際に出会った注意して欲しい虫たちも参考にしてください。

左はツバキの葉にいた「チャドクガの若齢幼虫」。飛んできた毛に触れてもかぶれるほどですから、あまり発見したくありません。

画像は葉の裏ですから、表からは全く見えない状態でした。葉をめくるときは裏側を確認してから行ってください。



左は、ハルジオンの花に止まっているカミキリモドキの仲間。日本に約40種いるうちの21種が有毒とされています。体液に「カンタリジン」と呼ばれる有毒物質が含まれているので、柔らかい体を不用意につかんだりすると、やけどのような火ぶくれが生じ、痛みを伴うとのことです。別名「やけどむし」。

「小さいカミキリムシがいる」と思って素手で触らないようにしましょう。



体長7ミリほど、ほぼ日本全土に分布し畑、水田などにも見られるアオバアリガタハネカクシ。体液に有毒物質ペデリンを含み、触れると火ぶくれのようなミミズ腫れが生じます。よく発生するのは7、8月で灯火にもよく飛んでくるとのこと。これも不用意につぶさないようにします。これも別名「やけどむし」とか「でんきむし」とか呼ばれています。

○こもれば池の広場の草花たちも春とは様変わりしていました。



ヒナキキョウソウ



ヒメコバンソウ



シロツメクサ



ヒメジョオン



ヒメヌカススキ？



コメツブツメクサ



ニワゼキショウ



ルリニワゼキショウ？

春に姿があった、ヤハズエンドウ（別名カラスノエンドウ）、スズメノエンドウ、カスマグサ、ヒメオドリコソウ、ハルジオン、タンポポの仲間、オオイヌノフグリ、ホトケノザ、ミチタネツケバナなどは見当たらなくなり、上の画像の草花に代わっています。シロツメクサとコメツブツメクサは続けて登場していますが、草原（くさはら）ひとつを見ることでも、移り変わりが分かります。これから夏に向かい、どのように代わっていくのでしょうか。



アメリカフウロ

○出会うのが楽しみな虫たちも紹介します。



これは、**オバボタル**。ホタルの仲間は日本には約 50 種いるそうですが、その中で光る性質を持つのは 10 種程度だそうです

有名なのは、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルの 3 種。このオバボタルは昼行性で、幼虫時代は発光するのですが、成虫になると光りません。

ホタルにとっての発光とは、どんな意味を持っているのでしょうか？



クズの葉にいた**オジロアシナガゾウムシ**。通称は「パンダゾウムシ」「パンダ虫」。その名の通り黒と白の体が目立つ比較的大きなゾウムシの仲間です。

「珍しい」と言われるほど少なくはありませんが、毎回出会えるとは限りません。



アカメガシワにいた**ナナフシモドキ**の幼虫。

「ナナフシ」とは七つのふしを持った木の枝のこと。その姿に似ている虫とのことで、「モドキ」がつけました。擬態をしているのでなかなか見つけるのが難しいのですが、出会うとテンションが上がります。

オスは激レアの存在で、見つかるとうニュースになるほど。普通はメスのみで単為生殖をします。メスが鳥に食べられても、卵は消化されずに排出され、種の拡散に役立っているとの話もあります。



月並みかもしれませんが「カマキリの赤ちゃん」です。成虫は、壮観、スマートでカッコイイ存在ですが、赤ちゃんは、ちっちゃくて可愛いですね。

○この時期には他にオタマジャクシからカエルになったばかりの幼体との出会いもありました。

次回観察会は6月23日（日）森の集会所集合

9：30～です

名東自然倶楽部のHPでは毎月の猪高の森の自然観察会の紹介をしています。

<http://sizen.ciao.jp/> から是非ご覧になってください。



5/17 エノキに産卵するアカボシゴマ
ダラ春型♀
特定外来生物に指定されている。在来
のゴマダラチョウ
やオオムラサキ等と競合する危険性が
ある。要注意！

(右上の自然観察グループをクリックしてください。)



木道に積もった柳絮（りゅうじょ）（右）
春のみに見られる柳の種が風に舞う姿
は幻想的。一見の価値あり。（左）